

## ミナミ・メソードの特色について

- 1) ミナミ・メソードでは、オーケストラ楽器（特にバイオリン）を教育楽器として扱っている

400年余りの楽器（バイオリン）の指導の歴史の中で、元来宗教的な発展と共に進歩してきた楽器群（バイオリンなど）は個人の技術指導を目的として基礎を中心に行われ、技術者が技術を教える職人的な師弟関係が成り立ち、場合によっては指導者の人格がその子弟に大きく影響されていました。これは楽器（音楽）に限らず、中世ヨーロッパの石職人（秘密結社のフリーメーソンにまでつながる）、パン職人、時計職人などなど、ありとあらゆる職業が中世のヨーロッパで専門化していく過程で生まれた歴史の産物でもあります。しかし指導法に由来する専門用語や非常に職人的な道具（楽器）に対する愛着による高価な道具（楽器）の使用により専門家以外が立ち入る余地を与える事を困難にしまい、結果として広く一般に普及されにくい状況が数百年も続いて来た歴史的な現実がありました。この一因には当時の音楽家がヨーロッパ貴族や宗教的な保護を受けていた事にも大きく影響しています。

日本に於いても、明治維新以後に急速に「西洋に追いつけ追い越せ」が合言葉となって、音楽の分野においても西洋に多くの若者が短期派遣（短期留学）させられ、多くが表面的な西洋音楽の基礎や技術のみを日本へ持ち帰り、西洋文化の歴史や宗教の中での音楽の本来の意味（意義、目的）を理解出来ないまま西洋音楽教育が始まりました。しかし西洋音楽が日本に入ってから100年が過ぎて、日本人にとっての音楽の在り方（特に学校教育の中での音楽）に多くの方が疑問を感じ、社会一般に普及してきたピアノやオーケストラ楽器をどのように日本の社会の中で教育として生かし、同時に生きた教材として我々の生活の中で生かすのか真剣に考える必要があると思います。

オーケストラは社会の縮図といわれて久しいですが、15種類以上の楽器が一つの組織を形成して指揮者と楽団のグループのパートのリーダーたちによって、運営され音楽を作り上げて行きます。時には合宿や演奏会を行い、地方や海外に演奏旅行に出かけ、15種類もの違った性格の楽器が、それぞれ自己主張を繰り広げながら一つにまとまって音楽を作り上げて行きます。その為には道徳や規則の社会性が必要となり、協調性や忍耐力が養われて結果として集中力、努力の習慣が身についてきます。また指導者は一国のリーダー並みの指導力と包容力、時には独創性と決断力も必要になってきます。これらの体験を幼少期の青少年が実体験することが、将来社会に出た時にどれだけ役立つか大いに期待されるものであります。

ミナミ・メソードでは、オーケストラ楽器（特にバイオリン）を教育楽器と位置付けて、バイオリンの上達を目的とした教育でなく、楽器を使った教育を目的としています。したがって年齢も才能も関係なく誰でも参加可能である。一般的な楽器習得の為の毎日の練習なども必要がなく、週に一度程度、オーケストラのグループが集まった時に指導者や仲間と一緒に楽器に触れることが

大切な教育の場になります。そこでは仲間とのコミュニケーションから始まり、楽器を通じての協調性や社会性を学び、学校教育では体験が難しい年齢差のある友人や指導者と一緒に音楽を作り上げる共同作業を体験します。特にコミュニケーション不足の現代社会において、グループの中でのコミュニケーション能力は人間社会の生活の上で一番大切な教育の一つでもあります。

## 2) 指導法の特性について

音楽（楽器）を勉強する上での一般常識というものがあります。その中でも指導者が念仏のように唱える言葉が「毎日の繰り返しの練習」「すぐれた専門家の指導」「音楽は遊びではない」

この常識を破っているのがミナミ・メソッドでもあります。ユニークだと評価する声もありますが、現状ではほとんどの音楽家が否定的であり、残念ながら教育者としての本質を見失っているとも言えます。以下について私たちの指導法の特色を考えて見ましょう。

- ① 家では練習はしない。1週間に1度だけ楽器に触れるだけ
- ② バイオリン（専門）の先生はバイオリン（専門）を指導しない
- ③ 楽器は子供にとっておもちゃの1つである
- ④ 音楽は遊びである
- ⑤ ハ長調から始める
- ⑥ ピアノ伴奏で練習する

- ① については、バイオリンなど弦楽器は調弦が必要であり、初級者は調弦が出来ないので調弦されていない楽器での練習は意味がありません。練習しない方がよほど良いです。

戦後の日本でSメソッドが一般的に普及（現在では世界中で普及）しましたが、これは母親と一緒にバイオリンのレッスンを受けて、調弦を覚えて母親が毎日子供と一緒に練習するスタイルで、この忙しい現代社会のニーズからは大きく離れていると思われます。私は残念ながらこれを過去の指導法と呼んでいます。

- ② については、バイオリンの指導者に限らず音楽（職業）専門家は、楽器が自分の命ですから非常に高価で良い楽器を持参しています。ところが一般的に初級者の使用する楽器は安価で楽器の調整が不十分である場合が多々あります。その場合に初級者が楽器の音を出す前に指導者が楽器の問題点を指摘してしまい、「この楽器では練習が出来ない、良い楽器を準備してください」となってしまいます。アジアの国々では日本からの寄贈された中古の楽器での指導になるので、音楽以前の問題は大きな問題点です。ミナミ・メソッドでは専門以外の先生が指導する為、楽器の質の問題は別として考えて、楽器は音楽を学ぶ道具として指導を始めることが可能になります。

- ③ について、専門家の先生方は子供のころから高価な楽器を使用している為に、

楽器を非常に丁寧に扱う事が習慣化されています。時には10代で1億円もするような楽器を使用する青少年も多いのが日本の現実です。そこで指導する場合も大変デリケートになってしまいます。しかし、子供にとってはバイオリンも道具の一つであり、「おもちゃ」が一つ増えたぐらいの感覚ですので、取り扱いがあまりにもデリケートになってしまうと、それだけで子供は拒否反応を起こしてしまいます。楽器も「おもちゃ」の一つだと認識すれば、子供はだれでも「おもちゃ」が大好きですから楽器にも愛着が湧いてきます。自分の楽器にペットのように名前を付けるのも良いと思います。

- ④ 音楽の遊びについて、導入指導では「弓のジャンケン」や「弓のバランス」、「逆さ弓での演奏」、「演奏しながらの行進」や「片足でのバランス演奏」、「歌いながらの演奏」など、じっと座って練習することは子供にとって非常に退屈である場合もあります。

大事なことは何を効率よく教えるか、繰り返しの練習が単純な繰り返しにならないことが重要です。同じ「キラキラ星」の練習でも、座って5回繰り返すのではなく、毎回違うパターンの遊びでやることで子供たちは喜んで練習します。そして自分から違う遊びを考え、仲間同士で遊ぶようになります。これは子供の世界では自然な事です。これは子供の能力を引き出す大きな力の一步となります。

- ⑤ 最近では、「ハ長調から始める大人のピアノ」と言うタイトルの教本を目にしますが、先に述べた「専門家が専門用語」で指導する一つの弊害にあたるのが楽譜の調性です。音楽理論とは言語学の文法のようなもので、子供が会話を覚えるときに文法を理解しなくても会話ができるのと同じで、本来音楽理論を理解出来なくても音楽はできるのです。現にだれでも音楽理論がわからなくても「カラオケ」が歌えて、世界中の人々に「カラオケ」は愛されています。

400年余りのバイオリン指導書のほぼ全ては、バイオリンの調性に合わせて  
シャープ。

系の調から始まります。これはバイオリンの本来の楽器のもつ特性からスタートして

ますが、音楽教育的に考えると非常におかしな事だと言わざるを得ません。し  
かし長年

いくら文法を勉強しても会話は上達せず、英語嫌いの日本人を増やしている日  
本の英語

これに関して異議を唱える者は業界にはいませんでした。その原因はそれぞれの  
専門家には専門家の意見が一番正しいと言う概念から発するものかも知れませ  
ん

教育同様に結果的に音楽嫌いを増やしてしまっています。バイオリンの先生曰  
く、「ハ長

調で初心者に指導するのは難しい」果たしてその事に挑戦した指導者が過去にどれだけいたのでしょうか？ほとんど指導者は自分が子供のころに教わったまま「現在の自分があるのは、自分の先生の指導方法のおかげだと信じている」のではないのでしょうか？いくらかは自分なりの工夫や指導を考えている指導者もいますが、幼少からのバイオリンだけの世界観からは簡単には抜け出せません。

## 聖書と同

一方、演奏家について考えると「過去の楽譜（教則本）に書かれていることは」であり、勝手に手を加えることは作曲家の侮辱にあたると思われる傾向があります。つまり教則本についても同じ思考が働き、過去の大先生が書いた教則本、自分の先生が使用し、自分が使用してきた教則本が聖書となり、それを信じないものは自分の現在も信じられなくなってしまうと言うジレンマがあるのではないのでしょうか。

ここではハ長調でバイオリンを始めるメリットを考えてみましょう。

第1は臨時記号を使わないで、音楽理論の説明も少なく済みます。それにより低学年でも音符を理解しやすく、指導も簡単になります。

第2に歌える音域で、歌いながら練習が出来ます。元来のシャープ系では歌える音域ではなく、音楽を始める子供が歌を歌わないで楽器を始める不自然さがなくなります。音楽の基本はソルフェージュ（歌う）であり、楽器が無くてもいつでもどこでも歌うことは可能です。

第3は、ほかの楽器（ビオラ、チェロ、フルートなど）と最初から一緒にユニゾン（同じ音）でメロディーを演奏できますし、他の教育楽器（リコーダー、鍵盤ハーモニカなど）とも簡単に合奏が可能になります。現在、日本でこの組み合わせは、ほぼ皆無の状態です。

## 演奏会場

オーケストラの多くの楽器はハ長調の楽器である。バイオリンは16世紀にがどんどん広がっていき、高音を必要とした演奏家の依頼でビオラ系統の楽器から5度音域の高い楽器としてバイオリンが発明された歴史的な経緯があります。よってオーケストラ全体を考えた時にバイオリンは非常に異質な調性であることがわかります。「木を見て森を見ず」になってしまっている現状です。ハ長調の森の中にト長調のバイオリンの木がたくさん生えている状態だと想像してください。

- ⑥ 一般的にバイオリン教室では、バイオリンの指導者が自分のバイオリンで指導するケースがほとんどですが、ピアノ伴奏による指導は、楽器を始めたばかりの子供たちにとっては、音楽の基本的な音程とリズムの両方を正確に学ぶこと

の出来る利点があります。バレエ教室においてもナマのピアノ伴奏付きで、子どもたちのその日のリズムや気分によって表現をピアノの伴奏によってより良く誘導できて、特にテンポの変化によるリズムは大切です。最近ではバレエ教室でもCDによる練習（商業主義的な傾向）が一般的になってしまったのはとても残念であります。

### 3) 子供たちの身近なメロディーを中心とした教材で指導する

教則本の多くが海外で勉強された先生の影響でしょうが、海外のメロディーで書かれたものです。これは幼少の子供が音楽を始めるにあたり、子供たちが耳にしたことがない西洋のメロディー（宗教音楽や西洋民謡）にいきなり接する訳で、非常に不自然であり子供にとって楽器を始める最初の問題点となっています。おまけに音域が違って（高すぎて）歌うことすら出来ないのですから音符が単なる記号でしかなく、理解しないで丸暗記して弾くだけの作業となってしまいます。これでは子供たちの興味を引くことはできません。また、指導者はこれを子供や親に弾けるまで練習を繰り返す事を強制しているのが現状であり、この忙しい現代社会の中で無駄な時間を費やし、時によってはこの無駄な時間こそが上達の道「急がば回れ」と勘違いしている指導者がいるのではないかと危惧するばかりです。

日本には日本のメロディー（民謡、童謡など）もあり、また子供たちがテレビ等でよく耳にする西洋のメロディーやアニメソングなどもある訳ですから、それらの教材を使って音楽（楽器）を指導する事は至って自然であり、子供たちが自分から興味をもって進んで音楽を楽しむ環境を作る事、準備をする事が指導者の大切な指導の前の仕事だと思います。実際にこのメロディーを歌ったり、リズムを取ってから楽器の演奏に入ることは、音楽教育の基本中の基本であると認識するべきでしょう。

子供たちにピアノを指導していた時に感じたことは、大変難しい曲であっても興味を持った曲は、弾けるまで自分で何度も練習して、最終的には弾けてしまう驚くべき状況を何度か目にしました。これは人間が本来持っている能力の一種であり、この能力（脳力）によって人類は発明や発見を繰り返して進歩してきたと思われれます。つまりいかに興味を持たせる環境を作るかが教育の原点であり、日本的な詰め込み教育では限界が出来てしまい発展が望めません。

「子供の絵本」を見ると、どれも子供たちが興味を持ちそうな外見でありながら、内容は非常に深く親も考えさせられる内容が少なくありません。そしてそれは絵本と言いながら、文字を覚える大切な道具ともなっている事にも気がつきます。楽器演奏では、楽譜を読めることは大切な事であり、絵本同様に興味を持って何度も読んでいるうちに、文字や文法を覚えるのと同じように楽譜や音楽規則（理論）を覚えて行くものだと思います。最近では多数多様な教材が「ドラえもん〜」「うんちの〜」などなど、いくらか商業主義ではありますが、どれも子供たちが興味を持って手にしたくなるような題材か

ら始まります。ミナミメソードも常に「こども目線」を中心に考えて指導を考えています。音楽教育だけが100年も200年も遅れて良い訳がありません。

#### 4) 音楽と言葉遊び

どの国でも幼児の子供たちが一般的に音楽より先に覚えるのが「ことば」です。ドレミを難しくCDEと教えるバイオリンの先生もいる現在ですが、子供たちが「ことば」に興味を持つ習性からするとドレミを教えるのはそんなに難しくありません。特にバイオリン弦の順番をGDAEと教えることの難しさは大人でもわかるはずですが、この国の指導者ときたら自分が教わったマニュアル同様にしか指導が出来ない、前時代的なロボットのようなようです。

「GDAE」アメリカでは「Good Dog Always Eat」とバイオリンの弦の並び方を教える方法もあるそうです。そして私たちミナミ・メソードでは「それはライオンのミミ」と教えます。共通しているのは子供たちが興味を持つ動物であり、イメージによる記憶です。GDAEと言う記号を覚えるのではなく「楽しいイメージ」を持つことです。また、そこから「ライオンのミミを見たことがある人?」「どんな耳?」「こんど動物園に行ったら見てこようね。」と自然にコミュニケーションが始まるのです。

ネパールなど南アジアには、ドレミ自体が存在しません。幸いインドやネパールでは、英語が発達（国中が数百の言語の為、英語が共通語として普及）していますので、ABCの記号で教えるのは簡単ですが歌が歌えません。そこで私たちはドレミで教えることにして、現地の指導者の協力を得て、ドの付く言葉、レの付く言葉を現地の子供たちの親しみやすい言葉に置き換えて指導を始めました。

次にミナミ・メソードでは、名前をドレミで表現する事を覚えます。例えば「ヤマモト・タロウ」の場合は「ミレドレ・ミレド」生徒一人一人が違う名前ですから時間がかかりますが、逆にその子だけの音楽になります。指名された子供は、自分の名前だからこそ必死に覚えます。そして名前から音楽に移っていきます。「ミレドレ・ミレド」から「ミレドレ・ミミミ」となり、「メリーさんの羊」のメロデーへと誘導できれば、子供たちは大喜びとなります。

音階を覚えるのも、日本の場合は幼児でも知っているような言葉を選び、「ドはドーナツ、レはレモン、ミはミカン、ファはファイト、ソはソーセージ、ラはラクダ、シはシジミ、ドはドーナツ」とそれぞれの形や色、においや味をイメージしながらピアノ伴奏を伴い四分音符3つと四部休符の形で音階を指導者の手拍子に合わせて弾きます。記号として無機質な音階でなくて、生きている味や色のある音階を弾くことで、音自体に変化が出てきます。

次の段階では、指導者や時には子供たちの中から言葉を探してもらい、「ドの付く言葉は何か知りませんか?」、子供たちの中からは「どんぐり」、「ドラえもん」、手が上がらな

い子供たちに対しては、先生から「ドラえもんのおやつは？」子供たち「どら焼き」、先生から「ドラえもんの妹さんの名前は？」子供たち「ドラミちゃん」、先生から「ドラえもんが使うピンクのドアの名前は？」子供たち「どこでもドア」と言うように、子供たちとのやりとり（コミュニケーション）が成り立ちながら、楽しい音楽指導が続いていきます。一般的に音楽指導の場では、指導者からの一方的な指示に従いながら、子供たちは楽器をつまらなそうに繰り返し弾く場面が多いようです。

## 5) ミナミ・メソード教本の活用について

通常の教則本では初級者は初級者専用であるが、ミナミ・メソードでは初級者用でも上級者も

一緒に演奏できる工夫がされています。また楽器のパートがバイオリンだけでなく、ビオラ、チェロ（ベース）などその場にあった組み合わせでアンサンブルの演奏が出来るように工夫されている。このような楽器の組み合わせによる編成は、モーツアルトの時代（1700年代、オーストリア地方）ではごく自然に普及されていたようです。それは現代でも同じですが、そこに居合わせた楽器のメンバーだけでもアンサンブルが楽しめる、演奏者目線の教材と言えます。

例えば、バイオリンを始めたばかりの生徒と3か月目の生徒の場合、教本の1と21番と一緒に演奏が可能です。そこへバイオリンを始めて半年目の生徒が参加する場合は、1番をサードポジションで参加が可能になります。プラス1年目の生徒がその場にいたら21番をセカンドポジションで演奏します。もし5年目ぐらいのベテランの生徒がそこに参加した場合は、6ポジションでD線を使って1番を練習する課題を与える事が出来ます。教材とは道具ですから指導者のアイデア次第で生きたり死んだりしてしまいます。一度自分が長年教わってきた方法や考え方から離れてみることは大切な事です。世の中にはいろいろなヒントが隠れています。

またミナミ・メソードではバイオリン2部、ビオラ、チェロ（ベース）プラスピアノ伴奏の5部構成になっており、バイオリンとピアノだけでも演奏を楽しめますが、仲間が集まりバイオリンとチェロだけ、ビオラとチェロだけ、又はビオラだけやチェロだけでも弦4部のアンサンブルが楽しめる工夫がされています。楽器をやっていればどんな楽器でも、誰でも仲間が出来て演奏できるスタイルが音楽の最大の魅力の一つだと感じることは多いです。

ピアノの伴奏が付いているのもミナミ・メソードの特色の一つと言えます。バイオリンの先生のレッスンを見学して気が付いたことがあります。それは全てのバイオリンの先生がバイオリンを弾きながら、ほとんどユニゾン（同じ音）で指導をしていることです。もちろん上級クラスの生徒にはその指導スタイルでも良いかもしれませんが、ほとんどの初級者の子供たちは、音程やリズムを理解せず拍子が取れません。その事でバイオリンやチェロの指導者の先生方は、生徒たちと何度も何度も繰り返す練習を続け、生徒の子供たちはそれに飽きてしまいます。そしてこれが楽器の練習、音楽の訓練だと錯覚してしまい、

この修練に耐えられない生徒は音楽嫌いになってしまうこともあります。これは音楽が悪いのではなく、指導者の頭が悪いとしか思えません。ピアノの伴奏は子供たちが知らないうちにリズムを教えてくれて、音程にも気づかせてくれるでしょう。そしてもっと大切なことは、バイオリンの先生がユニゾンだけで一緒に弾くのと違って、どんな簡単なメロディーであってもピアノ伴奏が入ることで音楽（アンサンブル）が成立します。これこそが子供たちが待ち望む音楽の喜びです。また友達や兄弟、保護者がピアノで伴奏することで新しいアンサンブルも生まれ、コミュニケーションが生まれ音楽の輪が広がっていきます。現代社会の問題の一つであるコミュニケーション不足の解消に少しでも役立てることもミナミ・メソードの目的の一つでもあります。

## 6) 個人指導とグループ指導（ミナミ・メソード）の違いについて

楽器指導の長年の歴史は個人指導が中心でありました。それは主に専門家を育成するための必要条件でもありましたが、現代社会において楽器が広く一般大衆のモノになった現状では個人指導だけでなく、多くの指導法や工夫が必要です。学校教育の場では非常に多くの教育楽器の指導法が導入されるようになりましたが、オーケストラとなると専門家の壁が大きく立ちはだかってきました。それはまさにオーケストラの楽器群は正に専門家の集まりであり、専門家以外が意見を言えるような分野ではありませんでした。ゆえに音楽や楽器（オーケストラ）の未来を考えた時に、古典芸能が伝統や権威だけで生き残れないのと同様の行く末が見えてきます。

個人指導との違いでは、青少年オーケストラなどでは、青少年時代に多くの巨匠との出会いがある事が言えます。テレビや演奏会で見るだけでなく実際に指導を受け、言葉を交わし、時には音楽や人生について話を聞くことは、その後の人生に多くの示唆を与える事になります。私たちのメソードによるオーケストラでは、世界的なプロの指揮者や著名な独奏者と毎年交流を重ね、個人指導のように海外留学をしなくても身近に接する機会が多くあります。

スポーツ選手、芸能人や時には政治家の会話の中では、子供のころにオリンピック選手や芸能スター、大統領に出会いその後の人生の大きな夢や希望につながり、励ましになったケースを多々聞くことがあります。またその道に進まなくとも、社会や世界で活躍する人々に出会ったことが有るのと無いのでは、その子供の夢を膨らませるエネルギーの量は随分と違ってきます。

またアジアの音楽交流などを通じて、アジア各地で現地の子供たちの音楽を指導する日本人やほかの国の人たちの活動は、日本の子供たちにとって大きな刺激を与えています。これらの活動はほぼ NGO などの海外ボランティアであり、無給の場合が多く、「人生とは何か、自由社会、資本主義経済とは何か」を問う機会を与える事でしょう。これは現在の学校教育や個人指導では経験が出来ない社会教育活動の一環であります。



## 7) 社会活動とオーケストラ

ミナミ・オーケストラメソードでは、以下の事を提案して実行しています。

「個人の演奏発表はしない」「演奏発表の機会をたくさん作る」「非日常を演出する」  
「音楽合宿や演奏旅行を毎年行う」「地域の音楽団体や青少年団体との交流を心がける」  
「地域の社会団体（ライオンズクラブ、ロータリークラブ、青年会議所、商工会議所）等の  
の  
行事に参加する」「海外交流を積極的に行う」「地域の老人福祉施設などの訪問演奏をする」  
「オーケストラの運営に上級生団員や保護者、地域のリーダー（有識者）が積極的に取り組む」

具体的な実践例として、「レオ・ライオンズクラブ」の結成と活動があります。

世界的な奉仕団体の一つであるライオンズクラブ（185か国、142万人の会員）は100年以上の歴史のある団体ですが、この組織の中には青少年育成の為にプログラムとして、12歳以上の青少年の団体をレオクラブとして位置づけて支援をしています。レオクラブでは青少年が自主的に企画、運営を行い、毎月例会を開催して反省をして、次回の行事について計画を立てます。

ジュニアオーケストラでは、一般的に音楽指導者と保護者会が中心となって企画や運営を行っていますが、レオクラブでは青少年が中心となって活動するために実践的な社会とのつながりや

仕組みを理解しながら、予算についても勉強する機会を得ることになります。もちろんすぐには出来ないことも多いですが、指導者やライオンズクラブの方々の協力を得ながらレオクラブを成長させていくことになります。

私自身も高校生時代に都内の青少年団体（戦後に芸大の先生方が、戦争で親を亡くして上野の

山でごろごろしていた青少年の健全育成の為に、進駐軍の楽器を譲り受けて活動を始めた団体）で役員を経験して、多くの活動実践を経験しました。わからないことも多かったですが、多くの先輩や指導者から学び、今日の私があると思います。特に多くの会費や演奏会のお金を預かり、支払いを経験することで責任の重さや社会活動の実感を体験しました。また政治家や実業家とも出会い、助言や励ましを頂きました。このような経験はその後の私の財産となりました。

## 8) ミナミ・メソードのオーケストラの目的について

楽器がうまくなる目的ではなくて、良い友達を作ることが目的の一つです。

学校という地域の枠や学年の枠を超えて、青春時代を喜びも苦しみも一緒に乗り越え、

また国も乗り越えた音楽という道具を使った教育は、遠くギリシャ時代から偉人たちによって大切にされてきました。特に哲学者のピタゴラス（紀元前582年～496年）は、2500年前に「ピタゴラス音律」つまり「ドレミ」を作り音楽の調和は神様が作ったとまで信じていました。

簡単に言うと音楽をする事は、調和を学ぶことであり、結果として良い友達（調和）を作ることであると解釈することが出来ます。良い調和は協調であり平和であります。世界が平和になるためには、世界中の子供たちが音楽に興味を持って誰でも音楽が出来る環境を作り、音楽の輪を広げていくことが大切だと信じています。現代社会において、それは難しい文学を読んだり、高等数学を覚えるより大切な事かも知れないです。

これらの経験は、ミナミ・メソードの音楽活動を通じて得られる大きな特徴であります。ここでやっと個人指導との大きな違いが見えてきて、青少年の音楽活動が音楽の為にあるのではなく社会教育活動であり、音楽はその為のツール（道具）に過ぎない事を理解されたでしょうか。

## 9) アジアでのミナミ・メソードの活動について

ネパールにおいて、ミナミ・メソードでオーケストラを始めるきっかけは、偶然だったかも知れませんが、結果として私は幾度もの政変の中を子供たちの指導ために単身、時には日本の子供たちを連れて、幾つもの楽器を担いでネパールに18回も出かけました。インド、ネパール、バングラデシュには「ドレミ」の存在しない世界だとも知らずに、1997年に子供たちにドレミのドから教えて毎日カレーを食べて、下痢をして救急車で病院まで運ばれたりしながら、ネパールの子供たちを20年以上指導する事になりました。現地の日本大使館に挨拶に出かけた時には、日本人の書記官に「ネパールにバイオリンを持ち込むのは50年早い」と言われ、「食べるのがやっとなで、字も読めないネパールの子供たちにオーケストラを教えに来るのは正気の沙汰ではないです」と言われてしまいましたが、その時にこれは自分にしか出来ない「ミッション」だと確信しました。

子供たちが「カースト」（ヒンズー教による生まれながらの身分制度）という数千年続く制度によって生活している現実には、楽器を演奏していても20年ぐらいでは変えることは不可能でした。しかし楽器を長く続ける事により彼らの中に、少しでも音楽の持っている本来の力が世の中を変えていくと信じてやみません。すでに彼らが音楽（オーケストラ）の指導者の立場になって、ネパールはじめ多くのアジアの子供たちが楽器に触れることにより、アジアの社会にも変容が表れ始めています。今後はミナミ・メソードがその国の子供たちに沿った教材となっていくように、より変化も求められるでしょう。それぞれの国でミナミ・メソードの指導をしてくださっている先生方にも、ミナミ・メソードが過去の教材とならないように、これについての新しいアイデアやその国の話題性のある教材を積極的に取り入れてもらえる様に望むばかりです。

私たち NPO 法人で始まったアジアでの子供オーケストラ設立運動は、その後カンボジア（2006年より）、ラオス、バングラデシュと続き、今後はミャンマー、モンゴル、中国、と計画が進んでいます。もちろんすでに子供のオーケストラが活動をしている東アジア（中国、韓国、香港、台湾）東南アジア（シンガポール、インドネシア、タイ、ベトナム、マレーシア）、南アジア（インド）北アジア（ウズベキスタン、キルギス）とは交流実績を積み重ねております。

なぜアジアで活動を続けているかと言うと、そこには大きな目標があります。まずアジア青少年オーケストラ協会の立ち上げ、そして世界青少年オーケストラ協会の設立という最終(?)目標があります。(もちろん太陽系青少年オーケストラ協会や銀河青少年オーケストラ協会もありますが)1990年代に私たちはトヨタ自動車の支援を受けて、世界青少年オーケストラ指導者の連盟を立ち上げました。そこには北米青少年オーケストラ協会(アメリカ、カナダ)とヨーロッパ青少年オーケストラ協会の代表者が参加していました。

ここでは、世界青少年オーケストラの名称だけど、アジアやアフリカからの参加(南アフリカ、オーストラリア、東アジアなど)が少なく、特にアジアをまとめる団体がありませんでした。しかし今から30年前にはアジアには青少年オーケストラどころかプロのオーケストラも数えるほどでした。そこで私はアジアの国々を回り、少しずつ仲間を増やしていきました。

近年、経済発展が目覚ましい中国においては、経済の発展と共に教育としての音楽が一般的となりつつあり、中国全土で音楽産業がとても盛んです。ここ数年、ミナミ・メソッドにも中国の各地の指導者や関係者から問い合わせが頻繁にきます。平和産業として音楽教育が広く広まるのは喜ばしい事ではありますが、特に大都市やその周辺では人口が多い為か一種の事業(営利)としての顔が大きく見えてきます。これは、経済成長期の日本の音楽教育に酷似しています。

同じく経済成長の著しいベトナムにおいても同じような傾向が見られます。首都のハノイには昨年新しいプロのオーケストラが、シンガポール資本により設立され、ベトナム第二の都市のホーチミンにもプロのオーケストラがありますが、第3の都市ハイフォンにはピアノ科の音楽学校しかありません。これは富の集中と文化の集中が大都市に集積されている顕著な例でもあります。

私たちが目指している音楽普及活動は、経済活動に関わりなく、どんな境遇でも子供たちが音楽を通じて多くの事を学ぶ機会を提供し、明るい子供たちの未来に向けて地域や社会全体に投資する事です。しかしながら私たちのNPOだけでは限界があり、現実には毎年少しづつしか先に進めないのも仕方のない事です。しかしながら誰かがやるべき事だと実感しています。

## 10) こども達への音楽（アンサンブル、オーケストラ）の効用について

子どもは楽器に触れることにより、心の成長を促します。

**好奇心、探求力、向上心、自立心、競争力**

そして練習に参加する事で、以下の力をつけていきます。

**集中力、理科力、注意力、表現力、判断力**

その上で**記憶力**も身につけていきます。

オーケストラに参加する事で、音楽演奏の中で事故に目覚めて、人間社会において不可欠な

**協調性、感受性、積極性、社会性**などを身に付けて

集団でのリーダーとしての**指導力**も養われていき、最終的に**創造性**が育まれます。

私たちの青少年のオーケストラ活動は、英語同様に世界共通語である楽譜（音符）を使って、

国際交流を積極的に行い、すでに世界40各国以上の国の青少年達と交流を続けています。その結果として音楽を通じて国際的なコミュニケーションが幼少期から自然に身に付きます。

これからの国際社会で生きて行く上でも**国際性**や**国際力**はとても大切な能力の1つです。

最近では学校教育の現場でも沢山の問題がありますが、私たちの40年にわたる音楽教育により、

5000人以上の子供たちの成長を、**社会教育、情操教育、音楽教育**と言う視点から見てきた経験からその成果を出すには長い時間が必要である事もわかって来ました。

ギリシャの哲学者ピタゴラス（BC582～BC496）が、自然の中から発見した音律は、2500年以上も前ではありますが、当時のギリシャの教育の中では数学と並んで音楽の教育が一番重要視されていた事実を現代社会が忘れてしまった結果、自然との調和、世界平和など現代社会の多くの問題があるのも事実です。

皇室を初め、欧米の王室や名門の家庭では必ずと言って良いほど、幼少期からの音楽教育が一般的であり、俺は単に教養としてのモノでは無い事に皆さんにも気が付いて欲しいと思います。